



ような指導を求めているのかについて考察する。これらを踏まえ4では、大学生に対する学習支援のあり方について、大学の学校化・脱学校化という視点から考察する。特に、「学習の共同化・相互性化」というキーワードをもとに、検討していきたい。

## 2. 大学生にとっての授業

### 2.1. 大学生の授業に対する考え方

1990年代後半、小・中学校の教育現場において授業が成り立たない現象がクローズアップされ、「学級崩壊」という言葉まで生まれて大きな教育問題となった。授業中に教員の指示を聞かないにとどまらず、授業中に立ち歩いたり、教室から飛び出していったり、暴言を吐くなどの事象が起き、その上、周囲の子どもが「我関せず」という態度をとる。授業が成り立たないのは、必ずしも授業方法が確立されていない若手の教師ではない。十分な経験を積んできたベテラン教員が、「最近の子どもは、わからない」と嘆く様子が見られた。授業不成立という現象は、どの教員にも無関係ではいられない危機としてとらえられた。

そういう面で見れば、大学における授業も同様の現象が見られてきた。大学生の授業態度については、すでに1980年代から授業中の私語や欠席・遅刻等が問題としてとりあげられてきており、最近では携帯電話を使った「メール私語」という言葉も登場している。このような学生の行為により、授業が成立しないような事態も報告されている(中岡, 1999)。

その一方で、昨今の大学生は授業の出席率が良いという話も耳にする。教員が出席を取らないと、「出席をとってほしい」と要求する学生まで現れているようである。少なくとも、授業に出席することに関しては意欲的な学生が増えているのかもしれない。

どのようにすれば、生徒(学生)が意欲を持って取り組む授業を作れるかという課題は、学校段階を問わず共通しているといえる。大学においても、多くの教員が頭を悩ませている課題である。この問題を考える際に、学生が授業や指導に対してどのような意識を持っているのかはあまり考慮されてこなかった。学生が、どのような意識で大学における学習に臨んでいるかを知ることは、大学教

育のあり方を考える上で必要なことだと考える。

そこで本章では、大学生が、大学における授業に対してどのような意識を持っているかを、授業中の逸脱行動という側面から明らかにする。ここで扱う調査データは、2003年度に大阪大学人間科学部・教育技術開発学研究室が、全国の20大学約2,700人の学生を対象に実施した質問紙による調査結果であり、本論文はその再分析を試みたものである。この調査データの分析結果に関しては、既に学会等で一部報告している(細川・西田・林・千石・田中・秦, 2004など)。

### 2.2. 授業における逸脱行動に対する意識

では、大学生が大学の授業をどのようにとらえているのかについて、授業中の逸脱行動という側面から考えてみよう。

上に述べた質問紙調査では、「授業中に化粧をする」「授業中に立ち歩く」など、11の行動を「授業における逸脱行動」としてとりあげ、それらの行動を、「してはならない」と考えるか、するかどうかは「本人の自由」と考えるか、という規範意識の面、及び回答者である学生自身が「する」「しない」という実際の行動、この2側面から質問を行った。実際の調査用紙では、以上の2側面を2×2に組み合わせ、それぞれの行動に対して「してはならないので、しない」、「本人の自由だが、しない」、「してはならないが、する」、「本人の自由なので、する」の4つの選択肢により回答を求めている。

まず、規範意識の面から見てみよう(表2-1)。「してはならない」と考える割合が高いのは、「立ち歩く」が76.7%、「私語をする」75.7%となっており、「カンニングをする」の74.2%をわずかながら上回っている。一方、「本人の自由だ」と考える割合が最も高かったのは、「学校・授業をさぼる」で71.1%であった。

一方、実際に自分がするか、しないかという点でみると、「しない」という割合が高い項目は、「立ち歩く」92.0%、「カンニングをする」91.5%、「化粧をする」91.0%、「教員にたてつく」89.6%となっている。一方、「する」と答えた割合の高い項目は、「居眠りをする」75.6%、「授業に関係ない勉強をする」65.2%、「携帯電話をいじる」63.7%であった。

表 2-1：授業中の逸脱行動に対する意識と行動  
(単位：%)

逸脱行動	してはならない	自分はしない
立ち歩く	76.7	92.0
私語をする	75.7	42.9
カンニングをする	74.2	91.5
携帯電話をいじる	64.6	34.9
化粧をする	64.5	91.0
居眠りをする	51.4	22.9
飲み物を飲む	50.2	60.0
関係ない勉強をする	45.5	32.9
途中退出する	38.3	68.4
教員にたてつく	36.8	89.6
学校・授業をさぼる	27.7	59.6

これらの結果を学年別に見たところ、まず規範意識の面では、どの行為においても、学年による統計的な差はほとんどないといつてよい。すなわち、学年が上がるほど、逸脱行為を行うのは「本人の自由だ」と考えているわけではない。

しかし、実際に行うかどうかには、若干学年による差がある(表2-2)。例えば、「学校・授業をさぼる」に関して「する」と答えた者の割合は、1年生に比べて4年生の方が9.5ポイント高い。一方、「私語をする」になると、1年生に比べて4年生のほうが10.5ポイント低い。それぞれの行為によって、「する」割合の高い学年は異なるが、全体的に見れば、1年生は「しない」、2年生は「する」、4年生は「しない」傾向にあるといえるだろう。

つまりこの結果は、学年が上がるほど、逸脱行為を「本人の自由だ」と考えるわけではないこと、そして、学年が上がるほど逸脱行為を「する」ようになるわけでもないことを示している。入学間もない1年生は授業態度が良く、学年が進むにつれて乱れてくるという言葉は、一見わかりやすいものだが、本論文で扱っている調査結果に関しては必ずしもあてはまらない、といえる。

表 2-2：学年×逸脱行動を「する」割合 (単位：%)

逸脱行動 \ 学年 (N)	1年生 (882)	2年生 (1000)	3年生 (501)	4年生 (280)	全体 (2663)
立ち歩く	3.5	9.9	5.6	5.0	6.5
私語をする	53.7	61.9	54.3	43.2	55.8
カンニングをする	4.9	8.3	7.2	10.4	7.2
携帯電話をいじる	61.9	68.0	64.9	52.1	63.7
化粧をする	5.1	8.0	6.8	3.9	6.4
居眠りをする	73.9	76.3	76.6	76.8	75.6
飲み物を飲む	32.2	41.9	40.1	40.0	38.2
関係ない勉強をする	60.0	70.7	66.5	59.3	65.2
途中退出する	21.0	36.1	34.5	30.7	30.2
教員にたてつく	6.2	10.0	9.4	11.8	8.8
学校・授業をさぼる	34.8	41.3	39.5	44.3	39.1

また、規範意識と実際の行動の組み合わせで考えてみる。すなわち、実際の調査用紙の選択肢に沿って、どの回答が最も多かったかを確認しておく。

「してはならないし、自分もしない」という回

答が最も多いのは、「立ち歩く」あるいは「飲み物を飲む」などの行為である。また、「してはならないが、自分はある」という回答が最も多いのは、「携帯電話をいじる」「私語をする」「居眠りをする」「関係ない勉強をする」である。その一

表 2-3：逸脱行動に対する規範意識と行動

	自分はしない	自分はある
してはならない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・立ち歩く</li> <li>・カンニングをする</li> <li>・化粧をする</li> <li>・飲み物を飲む</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・携帯電話をいじる</li> <li>・私語をする</li> <li>・居眠りをする</li> <li>・関係ない勉強をする</li> </ul>
本人の自由だ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員にたてつく</li> <li>・途中退出する</li> <li>・学校・授業をさぼる</li> </ul>	(該当なし)

方、「学校・授業をさぼる」「途中退出する」という行為に関しては、「本人の自由だが、自分はしない」という回答が多い（表2-3）。

このように見てくると、大学生は授業態度が悪い、とは一概には言えない。しかも、授業はさぼってはいけないものだ、あるいは途中退出してはいけないものだ、と規範的に考えているわけでもない。それらの行為を実際にするかどうかは本人の自由な判断だが、「私はしない」という意識を持っている学生が多い。すでに、授業の出席率の高さについては指摘したが、これも大学（教員）の側が授業への出席を強く促しているからではなく、むしろ大学生の自発的な考えに基づくものであるといえる。

これに関連して、筆者が担当している教養教育科目の受講生に、「大学における学習は高校までの学習とどう違うか」をたずねたところ、大学における学習に対して「自己責任」というキーワードが多く出された。「責任」という言葉がふさわしいのかどうかは議論の余地があるが、今の大学生は、大学は学生が自分で学ぶところである、という意識を強く持っていることがうかがえる。学生は高校までの学びと大学における学びを区別し、大学では学生が自発的に学ぶ場だということを強く意識しているのである。

したがって、最近の大学生はかつての大学生に比べて、学習に対して受動的で学習意欲が低いという言説も、鵜呑みにすることはできない。大学進学率が上昇していることは、不本意入学者の増加、受験勉強をしない入学者の増加、明確な志望理由をもたない入学者の増加などと結びつけてとらえられがちである。しかし実際は、希望すればどこかの大学には入学できる「大学全入」の時代を迎え、大学で何を身につけるのか、大学で学んだことをいかに卒業後に生かすか、といった「大学で学ぶことの意味」が、大学生に意識されはじめているのかもしれない。

### 3. 大学生にとっての指導

この節では、大学における「指導」に対して大学生がどのような意識を持っているのかについて考察する。そもそも大学における「指導」は、学問的な指導、研究指導を意味しており、それ以上でもそれ以下でもなかった。しかし昨今の大学で

は、それ以外の部分での「指導」が重要視される傾向がある。この傾向を前述の報告（細川ら、2004）では、小・中学校における「教科指導」と「生徒指導」という概念を用いて説明し、大学において「生徒指導」的な側面の指導が必要になっていることを明らかにした。

最近の大学生は、小・中・高校生と同様の「生徒指導」が必要になっている、ということは、大学生が幼稚化していると言い換えることもできるだろう。しかし、前の項で授業に対する意識を明らかにしたように、現在の大学生は学習に対して自覚的・自発的になろうとしている。生徒指導が必要になっていると考えるのは、大学・大学教員側の論理であり、学生の側から見れば違った見え方がなされているかもしれない。ここでも、大学生の側から大学教育がどのように見えているのかをベースに、議論を進めなければならないと考える。

#### 3.1. 大学生が求める指導

ここでは、大学生が現在、どのような指導を受けていて、どのような指導を希望しているか、という側面から考察を進める。本項で用いる調査データも、前節で用いた調査と同様のものである。とりあげる質問項目は、「次の事柄について教員から指導されていますか」と「次の事柄について教員からもっと指導してほしいと思いますか」の2項目である。<sup>9</sup>ここでの「次の事柄」とは、具体的な指導項目である。指導項目は、「授業の履修」「勉強の仕方」「出欠状況」「進路指導」「就職活動」「友人関係」「常識やマナー」「健康管理」の8項目である。本論文では、大学における学習に密接に関わる、「授業の履修」と「勉強の仕方」及び「出欠状況」の3項目を取り上げて考察する。

まず現在の指導状況について見ていこう（表3-1）。「教員から指導されていますか」という質問に対して4件法でたずねたところ、「授業の履修」に関しては「とても思う」と「やや思う」をあわせると31.9%、指導されていると「あまり思わない」と「全く思わない」をあわせると58.0%であった。「勉強の仕方」についてはそれぞれ、21.4%、68.1%。また、「出欠状況」については、34.2%、55.9%である。これらの項目に関しては、指導されていないと感じている学生が多いことがわかる。

表3-1：現在教員から指導されていると思うか（単位：%）

	とても思う	やや思う	あまり思わない	全く思わない	d.k., n.a.	計 (N)
授業の履修	8.1	23.8	33.8	24.2	10.1	100.0(2663)
勉強の仕方	4.4	17.0	37.4	30.7	10.5	100.0(2663)
出欠状況	9.3	24.9	31.9	24.0	9.8	100.0(2663)

一方、さらなる指導に対する希望を問う「もっと指導してほしいか」という問いに対しては、「授業の履修」について、「とても」と「やや」をあわせると50.9%と半数を超えている（表3-2）。「勉強の仕方」についても、51.9%となっている。

一方、「出欠状況」の指導は、26.5%にとどまっている。このことから、半数以上の学生が、授業の履修や勉強の仕方について、「もっと指導してほしい」という気持ちを持っている一方で、授業の出欠状況に関する指導は求めていることがわかる。

表3-2：教員からもっと指導してもらいたいと思うか（単位：%）

	とても思う	やや思う	あまり思わない	全く思わない	d.k., n.a.	計 (N)
授業の履修	22.2	28.7	20.0	15.7	13.4	100.0(2663)
勉強の仕方	21.7	30.2	20.9	13.9	13.3	100.0(2663)
出欠状況	10.0	16.5	30.7	28.4	14.3	100.0(2663)

では、現在の指導状況と今後の指導への希望を組み合わせ考えてみる（表3-3）。

表3-3において、Aの群は、現状で指導されており、さらにもっと指導してほしいと考えている群、Bの群は、現状で指導されているが、もっと指導してほしいとは思っていない群、Cの群は、

現状では指導されていないが、もっと指導してほしいと思っている群、Dの群は、現状で指導もされていないし、もっと指導してほしいという希望もない群である。それぞれの群に含まれる割合を見てみると、表3-4の通りである。

表3-3：現状の指導と今後の指導に対する希望の組み合わせ

現 状	希 望	
	もっと指導してもらいたい	もっと指導してもらいたくない
指導されている	A群	B群
指導されていない	C群	D群

表3-4：指導に対する意識（単位：%）

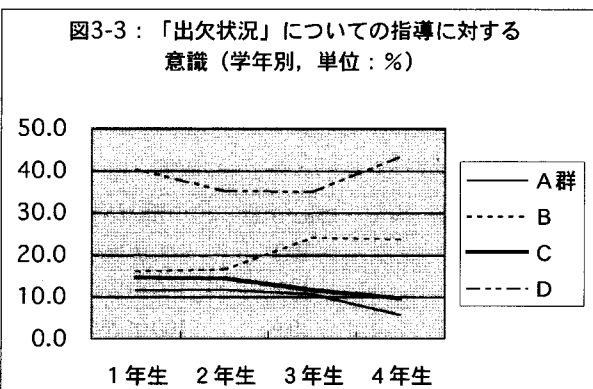
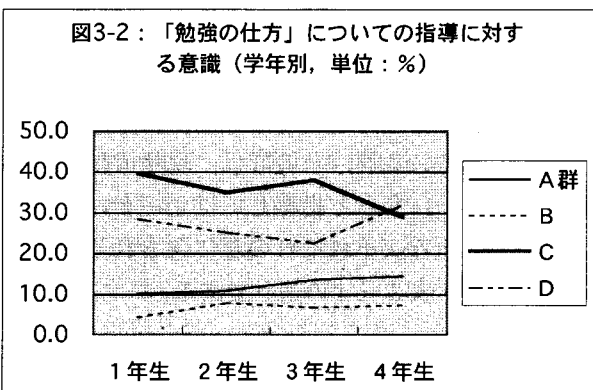
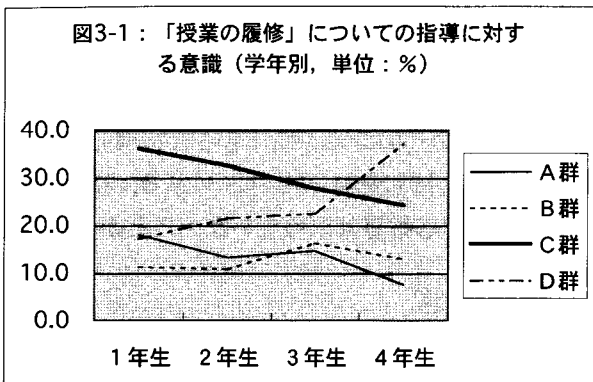
	A群	B群	C群	D群	d.k., n.a.	計 (N)
授業の履修	14.5	12.2	32.0	21.9	19.4	100.0(2663)
勉強の仕方	11.4	6.3	36.3	26.3	19.7	100.0(2663)
出欠状況	10.7	18.4	13.4	37.6	19.9	100.0(2663)

「授業の履修」については、Aが14.5%、Bが12.2%、Cが32.0%、Dが21.9%、「勉強の仕方」についてみると、それぞれ、11.4%、6.3%、36.3%、26.3%となっている。「出欠状況」は、10.7%、18.4%、13.4%、37.6%である。この結果から、授業の履修や勉強の仕方については、C群（現状では指導されていないが、もっと指導してほしいと思っている）に含まれる割合が高く、これらの項目に関する指導に対して強い希望を持つ学生が多いことがうかがえる。その一方、Dの群（現状で指導もされていないし、もっと指導してほしいという希望もない）の割合も低くない。2

～3割程度の学生は、現在指導されていないし、今後も指導してほしいと思わないという意識を持っており、「放任を歓迎する」という意思が感じられる。特に、出欠状況の指導に関してはD群が37.6%と、その傾向が顕著に表れている。

それぞれの群の割合について、学年ごとにどう異なるか見てみよう（図3-1～3）。「授業の履修」については、指導を希望するA群やC群の割合が学年を追うごとに減少し、逆にD群は増加している。4年生ともなれば、履修する科目数自体が少なくなることも関係しているであろう。また、「勉強の仕方」については、学年を追うごとの増

加・減少は見出せない。「出欠状況」についての指導は、1年生と2年生はB群とC群の割合にそれほど差はないが、3年生と4年生ではB群の割合が大きくなっている。



以上の結果から、授業の履修や勉強の仕方に関して、現在の大学生は指導を求めている状況にあるといえる。授業の履修に関しては、学年を追うごとにその希望の割合は低下し、勉強の仕方については学年による変動は見られない。とはいえ、指導されていない状況を歓迎する学生も一定割合で存在している。

### 3.2. 大学生の「高校生化」

前項で用いた4類型に即して言えば、10年以上前の大学生は、多くの者がD群に含まれていたの

ではなかろうか。これは筆者の経験に基づくものでしかないが、教員から指導されているという意識はあまりなく、かといって指導を希望しているわけでもない、という学生である。しかし、現状は変化してきていることが結果から読み取れる。特に、授業の履修や勉強の仕方について、指導してもらいたいという希望を持った学生が多いことがわかる。

このことは、大学生が大学入学以前に持っていた「指導観」をそのまま持ち込んだものであるとの指摘もなされている。つまり、何につけても、教員は「教えてくれる」存在だと考えるものである。特に、入学直後、初年次の学生にはその傾向が強いことは予想される。しかし、学年ごとの傾向の違いを見ると、学年を追うごとに指導への希望が減少していくわけでもない。つまり、大学入学以前から抱えている「指導観」を大学に持ち込んだ後、それがなかなか解消されていないことがわかる。高校までの学びと大学における学びの違いがあるのならば、指導に対する考え方も徐々に変容してしかるべきではなかろうか。だが、実際はそうなってはいない。したがって、指導を求める学生の現状を、学生の幼稚化・「高校生」化といった言葉で簡単に片付けるわけにはいかない。大学・大学教員の側の、指導に対するスタンスが問い直されなければならない。

見方を変えれば、大学教員の側が手厚く指導すればするほど、学生はより指導を求めるようになり、指導を求める学生に対処するために、教員側はもっと指導を充実させなければならないという循環になっている。どちらが原因でどちらが結果であるかは、単純には決められない。もしこの循環が発生しているとすれば、大学進学率の上昇にともなう大学構成員の様々な変化の中で、徐々に教育システムが変容していった結果だと考えられる。

## 4. 大学生への学習支援

### 4.1. 大学の学校化と脱学校化

では、大学はどのような教育システムの構築を目指せばよいのだろうか。どのような形で学生の学習を支援していけば良いのだろうか。これは個々の大学の個別的問題だが、一般的に昨今の大学は、「学校化」しているという指摘がしばし

ばなされる。この語は、大学における教育が、大学以前の学校、つまり小・中・高等学校のそれに近づいているという意味で使われている（渡部，2005）。正確には田中（2002a）が指摘しているように、大学が「近代学校化」しているという意味で、学校化という語を解釈すべきであると考えられる。高等教育のユニバーサル化による様々な現象に対応するため、大学は Semester 制、シラバス、授業評価、FD 等を導入することによって教育組織を効率化・システム化しようとしている。これらは、まさに近代学校が効率性を追求してきたのと同じ動向であり、大学の構成員だけでなく大学をとりまく制度、施策までも、学校化の流れに拍車をかけている。大学の「近代学校化」は、新たな大学教育のシステムを作り出すことにつながるかもしれない。

しかし田中は、大学を学校化すればそれで良いとは考えていない。大学教育が直面する危機に対応するためには、学校化のみでは不十分で、「脱学校化」の努力も求められる、と指摘している。学校化を超えていく、新たなシステムを構築しなければならないのだ。

では大学教育の「脱学校化」とは、何を意味しているのだろうか。大学における授業形態を例に考えてみる。大学における授業形態として、これまでもっとも多く採用されてきたのは講義形式である。講義形式は、教員から大人数の学生への一方的な知識伝授には有効かつ効率的である。大学の学校化の流れから考えれば、講義形式の授業をさらに増やすことが、大学教育を円滑に進めることにつながるはずである。しかし、実際はそうではない。教員から学生へ一方の情報伝達がなされることで、これからの時代を生きる学生を育てることができるわけではない。これからの大学教育においては、知識や技術の伝達・模倣ではなく、新たな知識・技術を学ぶための「学び方を学ぶ」必要がある。

#### 4.2. 学習の共同化・相互性化

では、「学び方を学ぶ」教育システムとは、どのようなものなのだろうか。田中（2002）はその一つの仮説として、大学教育の学校化だけでなく、「学習の共同化や相互性化という形で脱学校化が求められている」と指摘している。すなわち、大

学が教育機関として効率性を高めていくことは必要なことだが、それだけでなく、同時に学習の共同化や相互性化を進めていかなければならないという指摘である。

これは、大学における教育・学習に対する考え方の転換である。教員と学生、あるいは学生同士のコミュニケーションを通じて、教育し学習するという考え方である。学習の共同化は、具体的には授業の場において進んでいるといえるだろう。昨今、教員と学生、あるいは学生同士のコミュニケーションの時間を設ける、学生のグループによる共同作業を行わせ、作業結果を発表させたり、交流させるといった形式の授業形態が報告されている。このような共同作業を通じて、学生は学び方を身につけ、その後に新たな知識・技術を自ら学んでいくことにつながっていくのである。

#### 4.3. 学生同士の学習支援

大学における学習を共同化・相互性化しようとする動きは、授業外の学習においても表れつつある。既に、「オフィス・アワー」の導入によって、教員と学生の授業外のコミュニケーションの場は設けられている。昨今では、学生同士の支援活動を軸にした取り組みが行われるようになってきている。この取り組みには、「ピア・サポート」(peer support) という概念が取り入れられている。

「ピア」という語は、同輩、同僚といった意味がある。イギリスでは、学校におけるいじめを防止することをねらって、一部の子どもを「ピア・カウンセラー」として養成し、いじめの仲裁をするなど子どもによる相談活動に取り組んでいる（滝，2002）。日本では、子どもによる相談活動というよりは、上級生が下級生の面倒を見ることで、対人関係を学び、自己有用感を獲得するものとして位置づけられている。

いくつかの大学では、「ピア・サポート」と明確に位置づけられた取り組みが見られる。例えば広島大学では、2000年に「ピア・サポート・ルーム」を設置し、学生同士の相互支援のシステムを構築している（兒玉，2000，内野，2003）。このシステムは、カウンセリングの基礎等について研修を受けた学生ボランティアを「ピア・サポーター」として認定し、学生からの様々な相談活動に

応じるというものである。ここでは、学生生活上のあらゆる相談を対象としており、学生の相互支援として一定の成果をあげているようである。

また愛媛大学では、学生ボランティアによる多彩な学生支援を実践している（佐藤，2004）。愛媛大学の場合、大学主導ではなく、学生が主体的に実践してきた草の根的な活動を、大学が支援するという形をとっている。中でも、新入生が大学における学習にソフトランディングできるように行っている学習相談活動は、ボランティア自身の成長にもつながっている。同様に、お茶の水女子大学においても、学習支援活動の一つとして「ピア・サポート・プログラム」を全学的に実施している（土屋，2003）。上級生がサポーター役となって新入生の相談に対応し、教員がサポーターの補助をするという体制をとっている。

このようなピア・サポートのシステムが有効であると考えられるのは、いくつかの理由が挙げられる。1つには、学生同士という関係がもたらす気軽さである。教員と学生という関係においては、たとえ「オフィス・アワー」が設定されていても、どうしても気軽に学習相談をする状況にはなりにくい。しかし、より身近な先輩・後輩という関係であれば、小さな問題であっても相談し、解決することができる。

2つめは、学生同士という身近な関係は影響力が大きいことである。授業においても、他の学生の考え方や取り組みに大きな影響を受ける学生は多い。時には、教員からの指摘よりも、他の学生からの指摘に触発されることもある。同じ立場の人間からアドバイスを受けることは、学習の促進につながる可能性が大きい。

3つめは、サポートする側とサポートされる側の双方の成長を目指すことができる点である。相談をする学生だけでなく、相談を受ける学生も、学生とのコミュニケーションの中で学ぶもの大きい。サポートする側は、単なる学習支援と考えず、自らの成長を目指すことによって、より有意義な支援活動を展開できる。

また、結果として、学生同士のコミュニケーションの活性化をはかることもできよう。最近では、課外活動に参加する学生が減少していることや、携帯電話やインターネット等の普及によるコミュニケーションの形態が変化し、学生同士の交流が

少なくなってきたと言われている。このように、学生同士の支援活動は、大学教育の新たなシステム作りとして、一つの方向性を示すものではないかと考える。

## 5. おわりに ～大学の「学校化」のなかで～

本論文では、大学生が大学教育（授業や指導）に対してどのような意識を持っているのかを明らかにした。簡単にまとめれば、授業や学習に対して受動的なわけではなく、自発的に学ぼうという意欲を持っている学生は少なくないが、大学における学習に関して、教員に指導してもらいたいという希望が強い、ということになる。

一方で、大学・大学教員の側は、どのような対応をとっていけばよいのか。近年、大学を「(近代)学校化」することで、学生の変化に対応しようとする動きがあるが、大学が(近代)学校化するほど、学生は主体性を失う。主体性のない（ように見える）学生に対しては、さらに大学が手厚いサポートをしなければならなくなる。このような循環は、止めることのできない流れとして、これからも進んでいくのだろうか。おそらく、現在の状況が続けばこの循環は繰り返されるだろう。しかし、大学が教育機関としてどのような役割を果たすことができるかを問い直されている現在、大学自体がどのような教育を実践していくかが問われている。

その一つの打開策として、学習の共同化、学生相互の学習支援の導入を提案した。学生の相互支援を通じて、学生の学習がどれだけ充実したものになっていくかは、今後検討していかなければならない課題である。また、学生の相互支援を、大学・大学教員がどのように支援していくかも問われる。各大学における教育システムの構築は、これから特に重要な課題として位置づけられるだろう。

## 参考文献

- 細川和仁・西田亜希子・林 毅・千石亜矢・田中美美・秦 政春（2004）「大学生にとって、いま「大学」とは？（Ⅰ）—大学における「教科指導」と「生徒指導」—」, 日本教育社会学会第56回大会発表要旨集録, 108～113頁
- Johnson, D. W., Johnson, R. T. and Smith, K. A. (1991) (関田一彦監訳, 2001)『学生参加型の大学授



- 業一協同学習への実践ガイド』, 玉川大学出版部
- 兒玉憲一 (2000) 「学生ボランティアによる学生相談活動の試み-広島大学ピア・サポート・ルームのめざすもの-」, 『大学と学生』 429, 53~59頁
- 溝上慎一 (2004) 『現代大学生論-ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる』, NHKブックス
- 中岡慎一郎 (1999) 『大学崩壊』, 早稲田出版
- 佐藤浩章 (2004) 「『お接待』の心をキャンパスに~愛媛大学スチューデント・キャンパス・ボランティアの取組~」, 『大学と学生』 478, 25~32頁
- 鈴木 誠 (2004) 「学ぶ意欲を引き出す授業とは何か-北大一般教育演習「蛙学への招待」の授業デザイン-」, 北海道大学高等教育機能開発総合センター『高等教育ジャーナル-高等教育と生涯学習-』第12号, 121~133頁
- 滝 充編著 (2002) 『ピア・サポートではじめる学校づくり・実践導入編』金子書房
- 田中禮次郎 (2001) 「関西国際大学における学習支援の現状」, 『大学と学生』 433, 42~52頁
- 田中每実 (2002a) 「大学の学校化-大学教育改革の行方と教育理論-」, 藤田英典・黒崎 勲・片桐芳雄・佐藤 学編『教育学年報9・大学改革』, 95~112頁, 世織書房
- 田中每実 (2002b) 「〈総括〉大学授業研究から大学教育学へ」, 京都大学高等教育教授システム開発センター編『大学授業研究の構想-過去から未来へ-』183~206頁
- トロウ, マーチン (1976, 天野郁夫・喜多村和之訳) 『高学歴社会の大学』, 東京大学出版会
- 土屋賢二 (2003) 「お茶の水女子大学の学習支援体制」, 『大学と学生』 463, 24~29頁
- 内野悌司 (2003) 「学生ボランティアによる学生相談活動の試み~広島大学ピア・サポート活動について~」, 『大学と学生』 460, 40~46頁
- 渡部 真 (2005) 「『大学の学校化』とモラトリアム」, 渡部 真編『モラトリアム青年肯定論』現代のエスプリ460, 130~141頁, 至文堂